特集

あきらめない心が再び呼んだ、『どんど晴れ』。

4月24日、BS放送そして総合テレビでも5月6日・7日(予定)、『どんど晴れ』続編が、スペシャル番組として放送されます。NHK連続テレビ小説の長い歴史において、続編が制作されたのはあまり例がありません。その背景には、住民を中心に行政や各団体が一丸となった前向きな取り組みがありました。

地元の声が一つになった続編への思い

4年前のNHK連続テレビ小説で放送された『どんど晴れ』。放送終了後、地元では「続・どんど晴れ」誘致協議会を立ち上げ、続編放送に向けた積極的な動きを進めてきました。そして、いよいよ続編放送が現実のものとなります。物語のなかに息づく岩手人の優しさやあきらめない逞しさ。そこから得る感動を、もう一度たくさんの人と共有したい―。続編を願った根底にはそんな思いもあるのではないでしょうか。

NHK盛岡放送局・小松敬一局長も、放送を心待ちにする一人です。東京在住時に観た『どんど晴れ』は小松さんにとっても印象深く、冒頭で描かれた一本桜と岩手山の映像は自然ゆたかな岩手のイメージそのもの。平成21年6月、その風景への期待感を持って盛岡へ赴任してきたそうです。

「着任の挨拶で各地をまわると、随所で聞くのが、『どんど晴れ』は良かったという話の数々。番組に対する皆さんの思いを感じた出来事でした」と振り返ります。個々が抱いていた続編制作への願いを小松さんがしっかり受けとめ、その可能性を模索してくれたことは、本格的な誘致活動に結びつく大きなきっかけとなりました。

力の見せどころはここからでした。平成21年10月に市内20団体による協議会が立ち上がると、〝できるかどうかではなく、どうすれば続編ができるのか〟に向けて、動き始めたのです。

待ちではなく、動いたことの成果

「皆さん、岩手県人らしくない（笑）素早さでした。いろんなポジションの方が一つにまとまって動いた、最初の半年間が大きかった。私たちNHKの地方局

「盛岡は素材あふれる街。今回の成功をきっかけに、他にも一体となった活動をすれば、当事者は思った以上の結果が生まれるはず」とNHK盛岡放送局・小松敬一局長。

は、地域にどれだけお手伝いができるか、そこに存在価値があると思っています。縁あって盛岡に赴任した私ができるのは、盛岡市民の盛りあがりや活動の様子、岩手の多彩な魅力を、東京のＮＨＫにしっかり伝える。それだけでした」。

穏やかに話す小松さんも、プレッシャーが大きかったそうです。そして昨年秋には、海外への『どんど晴れ』放送のアプローチが実を結び、台湾での放送が実現しました。

「地元ホテル関係者のアイディアを受けて試みたことですが、話してみると思いは伝わるものです。本県出身の後藤新平や新渡戸稲造は、台湾の経済発展に貢献した人物。歴史的な関わりの深さも下地にあったのかもしれません。その後、10月11月には岩手から台北国際旅行博に併せ、交流団を2度に渡って派遣するなど、『どんど晴れ』を軸に思わぬ展開が生まれています。一つひとつの活動の蓄積が続編実現につながった気がします。何事も〝待ちではなく動く〟大切さを感じました」。

そう話す小松局長ですが、あくまで放送は一過性のもの…と言葉を続けます。番組という形で生み落とされたきっかけをどう使っていくかは、地元の皆様次第といえます。

「どんど晴れをご覧になった皆さんが少しでも元気になってもらえれば」と林さん。

おもてなしは感謝の心あってこそ

では、きっかけをどう活かしていくか。つなぎ温泉四季亭の専務取締役・林晶子さんに話を伺います。林さんは、ロケ地協力、旅館エピソードの提供など、『どんど晴れ』制作当初から関わってきた一人。観光客を迎え入れる立場にあることから、その反応は常々敏感に感じています。

「『どんど晴れ』が、しっかり視聴率を稼いだ理由の一つは、朴訥として純朴な盛岡のイメージが評価されたからかもしれない。でも、それが商売に結びついたかどうかは疑問ですよね。他県のように強引なほどドラマと何かを結びつけてブームを生み出したわけでもない。観光客もどっと押し寄せるのではなく、ちらほらと五月雨式にやってくるんです。地元から発信された情報を頼りに来るのではなく、自分なりのイメージと実際の場所を照らし合わせてじっくり楽しんでいる観がありました。そんなお客さんに対し、私たちはせっかく共有できる『どんど晴れ』という話題を、しっかりキャッチして投げ返せるかどうか。そこが大事では」と林さんは力を込めます。

続編では、初回以上に地元エキストラの参加が増えました。ある意味、本当に地元と放送局が一緒に作った番組といえます。エキストラには、林さんの経営する四季亭のスタッフや同じつなぎ温泉の老舗・ホテル大観の女将さんも駆りだされています。

「実は、倒産寸前の旅館という設定で…。マニュアル通りのおじぎをするシーンとして登場しています。ところが、逆にタイミングが合わず20テイクもやる羽目に。でも、せっかく実現した番組です。何でもやろうとがんばりました。逆に厄払いになるかも」と笑う林さん。おもてなしは感謝の気持ち、と話すその言葉には、番組に登場する加賀美屋さんの目指す「わが家に帰ってきたようなおもてなし」に重なる心が感じられます。

誰もが一歩前に出る行動を！

3月に起こった東北関東大震災は、岩手県内にも大きな被害を及ぼしました。盛岡市内でも地震の影響を受けたものの、街並みや景観はしっかり残っています。そして変わらないのは「心」。誘致に向けた動きをみれば一目瞭然、岩手の底力はここからといえるでしょう。観るものに元気と希望をくれる『どんど晴れ』の続編は、きっと明日に向かう大きな力となります。

盛岡に暮らす住民ができることは、訪れてくれた人たちを温かく迎える心を、行動にあらわし続けていくこと。林さんから頂いたこんな一言が印象的です。

「日本で一番やさしいといわれる盛岡の人は、その気持ちをぜひ表現してほしい。誰かが重い荷物を持っていたら、持ちましょうかの一声をかける。一歩前に出る行動がうれしい出会いを生むかもしれません」。

取材／「ＳＡＮＳＡ」企画編集委員会

たくさんの応募があったエキストラ募集。それは住民の番組への参加意欲のあらわれです。

番組のあらすじ（HPより抜粋）

前編「座敷童子を見た男」

夏美は盛岡の老舗旅館、加賀美屋の若女将として奮闘中。ある日、シンポジウムで出会った高木から加賀美屋の改革を提案される。柾樹と伸一は高木が手がける青森の旅館を視察。おもてなしのマニュアルで仲居教育をする方式に感銘を受け、導入に賛成する二人。しかし女将の環や夏美は、それが本当のおもてなしにつながるのか疑問を持っていた。

後編「玉手箱の誓い」

加賀美屋に長逗留している城之内信伍。かつて盛岡の「雪あかり」の祭りを題材にしてベストセラーを出したが、今は売れない作家。支払いもせず延泊する城之内を、青森から出てきた新人仲居、雪子が担当することになった。雪子は病気の城之内の枕元に雪うさぎを飾るなど、心をこめたおもてなしをし、城之内は次第に心を開いていく。

【放送日程（予定）】

4月24日（日）	BSプレミアム	15：30～18：00
5月6日（金）	総合テレビ	19：30～20：43
5月7日（土）	総合テレビ	19：30～20：43